

はできないんだけど、もし自分がそうだったらどういう状況が一番うれしいかなというふうなイメージを膨らませてお会いすることはできますので、そのイメージは膨らませていったのかもしれませんが。よく覚えてませんけれども。

○コーディネーター（川崎政宏）

どうもありがとうございました。

ちょうどシンポジウムも前半、折り返しのところになりました。

後半は、まちづくりの視点から少しそれぞれの地域の中でできる取り組みについて考えていけたらと思います。

前半のお話を受けて、後半は、一人一人が地域の中でどういった取り組みができるかということで、**犯罪のないまちづくり**、あるいは先ほどお話にもありましたように、**地域で被害に遭った方が普通にその後の生活を生きていく上で、暮らしやすいまちづくり**のためにどういうことができるか、あるいは学校、教育の現場で、それから福祉の現場でできること、そういったことを少しお話し合いをしたいと思います。

それでは、最初に、先ほど少し前半でもお話が出ましたが、今、美作県民局との協働事業で、**犯罪被害者遺族が語る命の授業**ということで、中学校、高校などへ市原さんが出向いて、「子供たちを被害者にも加害者にもしないために」という講演活動をやっています。先ほど少しその思いは語っていただいたんですが、実際出向いてどういった活動をしているか、あるいは子供たちの反応とか、学校の取り組み、あるいは先生方の受けとめ方、そのあたりを最初市原さんからお話を伺って、それからその後、それを受けて平賀さんの方からお話をまたしていただこうと思っています。よろしくお願いします。

○シンポジスト（市原千代子）

先ほど娘の関係で学校に出向くことに至った思いはお話ししたんですけれども、学校に行こうって、行きたいと思った経緯はそれだけではありません

でした。実は、犯罪被害に遭った、先ほど高橋先生も語られましたけれども、**事件後、私たちが話をしたいと思うことと、周りの方々が私たちに聞きたいと思うことが違いました。**特に事件後1年は、どうしてこういう事件が起こったのかわからないために、話すことができませんでした。そういう中で、1年ほどたったときに、息子のことを語ってやりたいと思い始めました。でも、周りの人たちは、事件が、私たち事件が終わって、私たちの中でもある程度済んだことという感じになってきていました。だから、**私が本当に話をしたいと思ったときに誰も聞いてくれる人がいなかった**っていうのが実情です。でも、事件の直後はいろんな方が声をかけてきてくれました。市原さん、つらいじゃろう、悲しいじゃろう、悔しい、悔しいよねって、頑張ってるっていろんな声をかけてきてくれました。でも、そのすべてが私にはすごくしんどく、重たいものだったんです。私も犯罪被害に遭うまでは、子供を亡くした親がどんなつらい思いをするか、悲しい思いをするか、自分の中で想像していました。でも、**実際に被害に遭った後って、想像を絶するつらさでした。言葉にできませんでした。**

そういう中で、大人の人たちが声をかけてくれると、あなたが思ってるつらさではない、あなたが感じている悲しさではないって私の体が訴えるんです。大人の人たちにかかわることはとてもとてもつらくなりました。**そんな中で、息子の同級生や友人たちが私の家にずっと来続けてくれました。**子供たちは全く大人と違って、そういうことは言いません。本当に遊びに来るような形で、おばちゃん、今日は行ってもいい、みんなで行っていいって電話かけてきて、うん、いいよって。一人でお茶とかジュースとかお菓子を用意して彼らを待っていると、彼らがやってきて、彼らも自分たちは同級生を亡くして、またもう一人の同級生は加害者となって、つらい思いや苦しい思いをいっぱい抱えてました。でも、そういうことを彼らは一切話しません。ただ、私と話をすることだけ、そのためにやってきて、たわいもない話をして帰っていつてくれました。それが何年も続きました。特に大学に行ってる子供たちは、春休みとか夏休み、そういう休みに帰ってくるたびに家に来てく

れて、息子は18歳でなくなって、成人式のときにもきてくれました。

そういうふうに私とたわいもない時間を過ごしてくれる中で、彼らは自分たちがいろんなことを悩んで、親との関係、学校での関係、いろんなことを悩んでいることを私に見事に見せてくれました。ああ、子供が、息子は18歳で亡くなりましたけれども、18歳から大人になっていってこういうふうになっていくんだっていうことを本当にきれいに、見事に彼らは見せてくれました。自分たちが抱えた悩みを相談してくれたりとか、とてもいい時間を彼らと過ごすことができました。そういうことから、彼らから学ぶこともたくさんありました。こういう思いをやっぱり子供たちに返していきたいって思ったのも事実です。私は、だからそういうことに向かおうとするときに、一番背中を押してくれたのはこういう子供たちの姿でした。だから、私は子供たちを、**本当にこの子供たち一人も命を失うことなく生き続けてほしいっていう思いを何とか伝えたい**って思ったのが現実です。

だから、そういうことがあって学校に行きたいと思ってたんですけども、実は岡山ではなかなかそういう場所は与えられませんでした。県外ではそういうことをやっていて、それを知ったある学校の先生が、講演に来てもらえませんかって依頼をくださったんですけども、その先生が校長先生に相談をしたところ、うちの学校は問題がある子供たちがいないのに、集団暴行ということで暴力の問題、子供たちに要らない意識を起こさせないでほしい、いわゆる寝た子を起こすなと私は受け取ったんですけども、寝た子を起こしたくないから、そういうことはやめてほしいって断られた。そういうことが何度かありました。

そういう中でも、私はやはりほかのよその県で学校に行っていて、子供たちに話をすると違うんです。一番最初に行った学校は近江八幡の中学校だったんですけども、犯罪被害者の人権ということで話をしてほしいということで、もう一人の被害者の仲間とともに行きました。総合学習の時間で話をさせてもらったんですけども、その学校はちょっと荒れてるなどと言われる学校で、先生もすごい心配をして、子供たちが落ちついて話を聞けないかも

しれない、ちょっと問題ある子がいるので大丈夫かどうかわからないんですけど、ということで行かせてもらいました。

でも、その子供たちが、私たちの一番前の席で本当に真剣に私たちの話を聞いてくれたんです。先生もびっくりされましたけれども、一緒に授業を受けていた子供たちが感想の中で何人か書いてくれました。あの子たちがあんなに一生懸命に人の話を聞いているのを初めて見た。私たちは、あの子たちが市原さんたちに失礼なことをするんちゃうやろうかなってずっと思っていました。それは一人だけではなくて、何人も書いてくれました。そういう影響があるのに、岡山では寝た子を起こすなって話す場所をいただけないということを私はとても残念に思っていました。

でも、そういうことから昨年ファミリーズの方で協働事業の応募枠、募集に応募をしてくださって、そういうことを県民局の方が受けてくださって、何とか岡山で、報道の方とかいろんな方の本当にたくさんの方の協力をいただいて、今学校の現場で話させていただいています。

やはり、話をさせていただくと、**子供たちは本当に真剣に私の話を聞いてくれます**。私が一番感じていることは、私は特別なことをするわけではありません。子供とかかわり、命の大切さを子供たちに伝えるだけ。それを受けて、子供たちは自分たちがどうしたらいいかっていうことを自分たちでそこから考え始めるなってすごく感じます。いただいた感想の中でも、本当に私の中で、ああ、すごい、私が言おうとしてたことを子供たちが一番感じてくれているって感じる感想をたくさんいただきます。そういう子の中には、**自分もいじめを受けていて何度も死のうと思った。でも死ななくてよかったと、これから何とか頑張って生きていきますって書いてくれた子供もいました**。本当に中学校1年生の、先日行ったある学校の中学校1年生の男の子は、小学校のときに僕もぼこぼこにされてて、死ななくてよかったって思いましたって書いてきてくれました。そういう感想もたくさんもらいました。そういうことをやっぱり話に行って、子供たちが本当にどういうつらいことがあっても生きていこうと思うきっかけになって、越えていけたんだったらよかった

なと思います。

それともう一つ、最近学校に出向いて、保護者の方が聞いてくれることも増えました。子供たちと保護者と一緒に聞いてくれることも増えました。その保護者の方に、私は必ず伝えることがあります。それは、最近私はよく感じるんですけども、いじめの問題で、今年の春にライフリンクの清水さんを招いて講演いただいたときにお聞きしたことがあります。それは、いじめの問題には2つの物語があるっていうことをお聞きしました。それは、いじめて、いじめられたとして死んだ子どもの問題と、それからいじめたと突然名指しをされて、その後生きていくって子供たちの問題っていうことをお聞きしました。いじめたとされた側は、それがいじめだと思っていなかった、思っていない、現実今でも思っていないという子が複数いるということをお聞きしました。もちろんいじめられた子供はいじめられたと思って亡くなった子供なんですけど、それをお聞きしたときに私は考えました。それで感じたのは、私たち大人は子供たちに幾らつらいことがあっても、誰かに助けてと言えば助けてあげられるということ伝えていないことを一つ感じました。それからもう一つは、いじめたとされた側の子供たち。もしかするとあなたの行ってる行為や言ってる言葉がいじめにつながってるかもしれない、そのことも子供たちにはちゃんと伝えられてないんじゃないかって思いました。だから、そのことを、子供たちと大人たちにきちんと最近伝えるようにしています。そうすると、本当に子供たちも大人たちも一生懸命考えられるようになっていきます。そういうことをやっぱり親子で考えていくこと、そういうことが子供たちを犯罪に巻き込まれない子供にもしますし、また犯罪を起こさない子供たちにもなっていくんじゃないかっていうことを最近特に感じています。いただいた感想にもそういうことをたくさん書いてくださっているってことも感じます。最近、行ってることから感じてる思いはそういうことが主なんですけれども。

○コーディネーター (川崎政宏)

ありがとうございました。

NPO法人として県民局と協働事業を始めさせていただいた中で、今市原さんのお話にもありましたように、**ただ学校に出向いて講演をして終わりというのではなくて、そこに地域の方たち、保護者の方たち、それから学校の先生方、非常にそこが一つの地域の中での一緒に命の大切さを考えていく場になっていく、そういう学校が幾つかありました。**そうして、今市原さんのお話の中にもありましたように、子供たちの中にある暴力の問題、いじめの問題、そういったことを一緒に大人たちが考えていく一つのきっかけにもなっているように私も考えています。

そこで、この9月に**いじめ問題に対する新たな提言**をまとめられた、その場にかかわっておられた平賀さんの方から、今命の授業に市原さんが出向いておられることを踏まえて、学校の現場の方の取り組みを少しお話しいただければと思います。

#### ○シンポジスト（平賀和治）

いじめということについてのお話をということなんですけど、その前に1点、市原さんの今のお話を受けて、先日私も市原さんとご一緒して、市原さんのご講演を聞かせていただく機会をある県南の中学校の方で持ちました。そのときの一つのお話をさせていただければと思います。

市原さんと一緒に体育館に入っていきますと、茶髪というか金髪の男の子が1人いました。周りの子は黒い学生服を着ているんですけども、その子だけはカーディガンを着ていて、市原さんが話し始めても隣の子にパンチするような格好をして、ちょっかいを出したり、周りの子に話しかけたりして全然落ちつかないという様子で、たまに市原さんの方をちらっと見て、様子をうかがってまた隣の子にちょっかいを出しているというような状態で、市原さんのお話、非常に感銘を受けるお話、90分間お話を聞いたんですけども、彼らが帰るときに、市原さんがそのときに、さようならだったかこんにちはだったか声をかけたんですね、その男の子に、ちょうど通路の一番端にいた

んで、さようならっていう声をかけたら、その子が「ああ。」っていう声を出したんです。市原さんのすごいところは、さらにそこでもう一回、さようならっていうふうに声をかけたら、また「ああ。」っていう声がある、それで終わったんですけども、我々が体育館を出ると、その男の子が大きな声で、「あああ疲れた。」っていうふうに体育館に響くような声で、大きな声で言って。私と市原さん、それから警察の方と一緒に校長室でお話をしようということで校長室に行ったんですけども、その後すぐに戸があいてその子が入ってきて、「ご苦労さまでした。」と言ってすっと出ていったんですね。私はおもしろいなと思って校長先生に、おもしろい子ですね、ふだんどんな子なんですかって話を聞くと、校長先生、いやあ、今日彼はよく頑張ったんですというふうに言われたんです。どんなことなんでしょうかって話を聞くと、校長先生が言われるのは、「彼はいつもは給食の前にやってきて、給食を食べたら帰るんです。これはちょっとよくないことなんで、これは指導しないとイケないことなんですけども、そういう子なんです」と。ですけれども、今日市原さんという方が来られてこんな話をするんだよということを担任の先生から前の日に話を聞いたと。すると今日は彼は帰らずに残っていたんです、体育館にも入るしということで。彼にとっては本当に、最後に大きな声でああ疲れたと言ったのは本当に疲れた90分間だったんだらうなという話をして、私それを聞いて、やはりこの子のとった行動というのが、いつもは給食を食べて帰るのに、自分がここにいるということを周りの子にどう思われているんだろうか、自分のプライドとか、おまえは何でこんなところにいるんだと、今日の話をおまえ聞きたいんかっていうふうなことを周りの子に気づかれないかという思いで隣の子にパンチをしたり、ちょっかいを出したり、それから最後に疲れたあと言って自己主張をしたり、だけでも彼の心の中には、市原さんの、暴力で亡くなった子がいるという、そういった話を聞きたい。それはなぜかという、外見で判断してはいけませんけども、きっと彼もそういった暴力ということに興味があったり、そういうことをしている子なのかもわからない、そういう中で市原さんのお話を聞いてみたいという

思っている、方策としてそういう行動をとったりしたんだろうなあというふうに思ったんですね。彼にとって、市原さんのお話というのは非常に何か響いたものがあったんだと思うんですね。ですから、最後にご苦労さまでしたという言葉で言ってきたのかなあというふうに感じました。市原さんのお話というのはほかの子も非常に神妙にして聞いていましたし、きっとほかの子たちも自分の生活経験の中でいろんな経験をして、いろんなことを感じた中で、市原さんのお話の中で、母親としてのつらさだとか、それから友達として友達のつらさだとか、命の大切さだとか、いろいろなことを感じたと思うんですけども、やはりそういった子にとっても非常に響くものがあったのかなあというふうに思いました。先ほど、岡山県では最初校長先生に断られるという話があって、ちょっとどきとしたんですけども、こういった市原さんのお話を中高生に聞かせるということは、新聞やテレビで興味本位で出来事としてしか見聞きすることのない犯罪、冒頭に高橋先生の方も、自分も今までは事件をこんなふうに見ていたというふうなお話がありましたけども、そういった**無機質な事件**というのではなくて、**こういったお話をじかに聞くことによって、犯罪にはやはり人がかかわっていて、その人の周りの人や、人には怒りや悲しみやつらさといった心の痛みが伴うものだっていうふうなことを気づかせるにはいい機会なんじゃないかなあ**というふうに感じています。

それから、先ほど来のいじめということについてですけれども、学校の中で今大きな犯罪というか被害というか、そういったいじめというのがあります。ご存じのとおり、昨年の中ごろは各地でいじめによって自殺ということが起こってありました。こういった自殺ということは、本人にとっても家族にとっても大変悲惨なことで、絶対に起こってはならないということで我々もいろいろと対策をとっているわけですけども、今日資料の中に、このオレンジ色で、ストップいじめというリーフレットを持ってまいりました。



これは、先ほど来川崎先生からお話しいただいているいじめ対策行動推進会議というものを立ち上げて、そこから提言をいただきました。教育委員会から、こんなことをしなさいということではなくて、家庭裁判所の調査官とか、それから警察の方、児童相談所の方に集まっていたいで、いじめをなくするためにはどんなことをすればいいかっていうふうなことのご提言をいただいたものを抜粋したような形のリーフレットなんですけども。まず開いていただいた最初に絵があると思います。今、学校ではこういった資料というか物をもとにして、これいじめの3層構造だとか5層構造だとかと言うんですけども、**まず1つはいじめられている子がいるということです。これについては、この子を絶対に守るというメッセージをその子に与える。**先ほど、市原さんの方からもあったように、いじめられている子は絶対に守って、その子がどうにか周りに相談できるような、そういった気持ちを持たせるということが一番大事であろうというふうに思っています。

それからもう一つは、**いじめている子がいるということです。このことについては、いじめを見つけたら、まず最初何が何でもそのいじめをやめさせるということが大事です。**説得するのではなくてまずやめさせるということが大事で、その後、これも先ほど市原さんが言われてましたように、最近のいじめというのは、いじめている側が余り意識をしていない、自分がいじめているという意識が余りない、というのが考えられます。ですから、いろいろないじめの事例だとか、それから自分がいじめている子の気持ちを伝えたりする中で、やはり自分、その子がいじめているということをきちんと認識させて、そのことを反省させなければいけない、そういうことを指導しています。

それからもう一つ、今気にしているところが、その周りで、左側に、あまたまたふざけてるとか、やっちゃえやっちゃえとか、おまえらもやれよというふうに出している図があると思いますけども、**周りではやし立てる子供、そういう子も存在しているんです。**そういう子や、それからもう一つは、右側の真ん中あたりに、僕に来ると嫌だなんていうことを言っている。今の子